

学生海外調査研究	
FÉTIS, François-Joseph の和声理論に関する資料の収集	
大迫 知佳子	比較社会文化学専攻
期間	2008年11月30日～12月13日
場所	フランス・ベルギー
施設	11月30日～12月7日 フランス国立図書館 12月8日～12月12日 ベルギー王立図書館

### 1. これまでの研究経過と海外調査の必要性

本海外調査は、19世紀フランスやベルギーにおいて非常に大きな影響力を持った音楽理論家Fétis, François-Joseph (1784-1871: 以下Fétis) の和声理論に関する著作のうち、日本国内では入手困難、または入手不可能である資料を収集することを目的とするものである。調査施設は、フランス国立図書館と、ベルギー王立図書館の二館であるが、特にベルギー王立図書館音楽部門には、Fétisの生前の蔵書をすべて保存した「Fétisコレクション Fonds François-Joseph Fétis」というコレクションが存在する。

報告者の博士論文のテーマは、Fétisがとりわけ関心を向けた和声理論についてであり、彼の残した和声理論に関する著作の分析により、理論と実践の両視点から、Fétisの和声理論を解明することを目的としている。Fétisの著作は、音楽に関して多岐のテーマに渡り、数多く存在するが、和声理論に関する著作は、翻訳書を除けば、国内にはただ2冊しか所蔵されていない。

『芸術及び体系的な科学として考えられた和声の歴史概要 *Esquisse de l'histoire de l'harmonie considérée comme art et comme science systématique*』(1840、友人達のために50部のみ出版、以下 *Esquisse*) と『和声の理論と実践の総論 *Traité complet de la théorie et de la pratique de l'harmonie*』(1844、調査旅行前に、第2版を入手済み、以下 *Traité*) は、Fétisの和声理論に関する主要な著作であり、先行研究においても頻繁に分析が行われている基礎文献であるが、これら2冊の文献は、幸い指導教官のご助力を得、入手することができた。しかし、他の著作については、お茶の水女子大学附属図書館を通して、海外の図書館への相互貸借、複写依頼を行うも、古い貴重資料であることを理由に貸

借・複写を拒否されていた。このように、日本国内で資料を手に入れることができない、ということが第一の海外調査の必要性である。

もう1つの理由として、Fétisにおける理論確立の様態があげられる。Fétisは、1816年には、自身の和声理論に関する著作を完成させ、1823年頃に、和声理論に関する最初の著作を出版している。その後、1831年春、パリのブローニュの森で音楽理論の原理に関する靈感を得、それをもとに1832年に「音楽哲学と音楽史の講義 *Cours de philosophie musicale et d'histoire de la musique*」(以下、*Cours de philosophie*) という講義を行うが、この時期から晩年まで、和声理論に関するFétisの主張は基本的にはほとんど変化していないように見える。すなわち、1831年の原理をもとに1832年の講義を行い、1832年の講義を1832年の『音楽雑誌 *La Revue musicale*』(1832年5月26日 第17号-1832年7月21日 第25号) で発表し、最後にそれらをもとに *Esquisse* や *Traité* を著わすといったように、同じ理論を、異なった表現でくり返すという様相を呈しているのである。その一方で、著作を再版する際、元の版への加筆(訂正ではない)や削除を頻繁に行っている。例えば、『音楽家伝と音楽資料総覧 *Biographie universelle des musiciens et bibliographie générale de la musique*』の初版(1835-44)には、「音楽史の哲学要論 *Résumé philosophique de l'histoire de la musique*」という250ページ余りの補足論文が添えられているが、第2版(1860-65)では削除されているし、*Traité* の第3版(1849)には、初版・第2版(ともに1844)へ寄せられた読者の疑問を踏まえる前書きが新たに付け加えられている。これは、今回の調査で明らかになったことであるが、『和声と伴奏の基礎教程 *Méthode élémentaire et abrégée d'harmonie et d'accompagnement*』

(s. d.1823/24?, 以下 *Méthode*) の第2版 (s. d. 1839?) には新たに序文が書き加えられていた。このように、Fétisの著作においては、同じ著作の異なった版を参照・比較することの重要性が認められる。

以上のことから、Fétisの和声理論に関する研究を進めるためには、国内所蔵のない著作、及び、同じ著作の異なった版を所蔵する図書館への海外調査が必要であった。

## 2. 調査の概要と成果

### 2-1. フランス国立図書館

報告者の出発の直前に、フランス国立図書館の音楽部門が、電気系統のトラブルにより閉館されるという情報が入った。音楽部門には、Fétisの著作、Fétisが編集・寄稿を行った雑誌、そして彼の書簡が所蔵されている。情報を受け、すぐに音楽部門へ、本調査が公的な調査であることを説明し、閲覧を検討してほしいという旨のメールを送付したが、向こう5か月の閉鎖が正式に決定したということで、この要求は叶わなかった。しかし、音楽部門にあるマイクロフィルム資料の閲覧だけは可能であるということと、どうしても資料を入手できない場合はパリ国立高等音楽院のメディアテークに行ってはどうかという助言をうけることはできた。当初はすべてがそろっている音楽部門を中心に調査を進める予定であったが、この閉鎖により、急遽、メディアテークへの調査も視野に入れ、他の館に所蔵されている同じ資料の閲覧に予定を変更し、ミッテラン館 (科学技術部門)・リシュリユー館 (芸術部門・音楽部門/マイクロフィルムのみ)・オペラ座館という3館での調査を行った。

ミッテラン館では、主に、Fétisの著わした、和声理論に関する、出版された著作に対する調査・閲覧・収集を行った。

*Traité*の第4版<sup>1</sup>には、前述したように、47ページ余りの序文が加筆されている。序文の中で、Fétisは自分を「天性の和声家」とも表現し、「和声の確かな基礎とはなにか」を、Fétisの考える調性 (tonalité) の概念を中心に説明している。この中には、1831年に受けた音楽理論への靈感についての詳細や、1816年に著わした、和声に関する著作 (未出版) についても記述されていた。*Traité*の第2版には、*Méthode*が付録として付与されていたが、第4版には、単旋聖歌の手引き書が付録として付与されていた。

また、『ギリシャ・ローマ時代の諸音の同時的調和に関する覚え書き *Mémoire sur l'harmonie simultanée des sons chez les grecs et les romains*』(1858) は、先行研究

での詳細についての言及がなく、どのような著作であるかが不明であったが、実際に閲覧することによって、これが、ベルギーのロイヤルアカデミーでの論文であり、その主な目的は、ギリシア・ローマ時代の古い音楽について、専門家ではない人にも分かりやすいように説明することであったということが明らかになった。この時代の音楽について知るためには、その音楽の調性 (tonalité) やリズム、楽器についての十分な知識が必要であると主張するFétisの記述の中には、調性 (tonalité) やリズム、この時代の和声についての意見や、ギリシア・ローマの時代に和声が存在したか否かという主題も見受けられ、彼の和声についての考えを知る上で、有用な資料であった。

『音楽基礎論 *Traité élémentaire de musique*』(s. d. 1831/32?) は、6つのセクションから成る<sup>2</sup>。ミッテラン館に所蔵されているおそらく初版の、第5セクションには、後に *Traité* 等に表示されることになるFétisの和声理論と、基本的には変わらない理論が展開されている。しかし、ところどころに僅かな相違も見られた。例えば、彼独特の4つの調性システム (後述) についての理論はこの時点ではまだ完全には確立されていなかったようで、同システムに対応する4つの転調の方法についての説明はなされているものの、これらのシステムにおける具体的な用語などは見当たらなかった。また、協和・不協和の分類において、Fétisが後に用いる不協和の分類名「調的不協和」の言葉が見受けられず、和声外音が *modification* に含まれるという記述を見つけることもできなかった。これらの記述は、Fétisの初期の理論を知り、特に、彼の4つの調性システムについての理論の確立時期を推測するための重要な資料である。

リシュリユー館とオペラ座館では、Fétisが創刊した『音楽雑誌 *La Revue musicale*』において、彼が、和声理論について言及した記事の収集を行った。*La Revue musicale*に掲載された全記事名と、その筆者名は、雑誌の発行年月日に従って『音楽雑誌国際目録 *Répertoire international de la presse musicale : Revue musicale 1827-1835*』(1991) に整理されており、すでに入手済みであった。1827年2月8日から1835年11月1日まで刊行 (以降、他紙と合併) されたこの雑誌のうち、1829年から31年までの記事は、フランス国立図書館 Gallica で閲覧することができる。そのため、今回はそれ以外の記事、つまり、1827年、28年、32年～35年を調査の対象とした。リシュリユー館の芸術部門には、1828年 (1月31日～7月26日) - 1831年の記事がマイクロフィルムの形態で、音楽部門にはす

すべての記事がマイクロフィルムの形態で、そしてオペラ座館にはそれらが、本の形態で保管されていた。

*La Revue musicale* の調査において特筆すべきは、先にも触れた、1832年の講義 *Cours de philosophie* を記事にしたものを収集できたことである。この記事は第1レッスンから第8レッスンまで8回にわたって連載されている。記事の中には、調性、リズム、音階、延長・置き換え・変位を含んだ和音等に関する重要な記述が散見される。そして、この記述において、音楽や和声を歴史的な観点から考えようとする姿勢や、数や幾何学などから導き出される和声理論への否定的な立場、異なった民族の異なった音階についての言及、グレゴリオ聖歌の時代の音楽における導音（三全音）の不在と、Monteverdi, Claudio (1567-1643) の刷新についてなど、*Esquisse* や *Traité* で主張される Fétis 独自の考えをすでに読み取ることができる。リズムについての記述は、のちの4つのリズムシステムを予見させ、また、後に Fétis が繰り返し主張する、彼独特の4つの調性のシステム（単調性的システム *ordre unitonique*、移行調性的システム *ordre transitionique*、複調性的システム *ordre pluritonique*、全調性的システム *ordre omnitonique*）についての最初の言及も、ここに見て取ることができる。彼は、最後の *omnitonique* について、*Traité* の中で、「私が音楽の和声的な方向性の最後の結果（＝*omnitonique*：大迫註）を *Cours de philosophie*（1832：Fétis 註）で予見し、言った時、私はこの結果が我々のこんなにも近くにあるとは信じていなかった」（FÉTIS 1844：195-196）と述べているが、1832年7月14日の「*Cours de philosophie* 第7レッスン」の記事の中で *omnitonique* は今日まで知られていないシステムであり、そのシステムの必要性もまだ感じていなかったという旨が書かれた箇所が、それを証明している。この言及は、4つの調性システムについて論じる上でも、大変興味深い言及の一つである。

また、ある理論書や音楽理論をめぐり、Fétis とその理論書の著者、あるいは当該新聞の読者との議論が往復書簡のようにして掲載されている記事も多く見受けられ、これらも収集の対象とした。

その他にも、博士論文のテーマとして既述した、和声の実践に関連する事柄、例えば、パリで行われたコンサートや、Fétis の出版した楽譜についての興味深い記事を収集することができた。この詳細については、博士論文において、明らかにしたい。

## 2-2. ベルギー王立図書館

ベルギー王立図書館には、先述したとおり、Fétis の生前の蔵書をすべて保管したコレクションがある。

このコレクションに保管されている全資料の目録はすでに出版されており（『Fétis の蔵書カタログ *Catalogue de la bibliothèque de F. J. Fétis*』1969）、国内（国立音楽大学附属図書館）で入手済みであった。これらの資料の閲覧には、図書館入館手続きと、音楽部門での資料請求手続きの他に、貴重資料の閲覧のための手続きが必要であり、1つの資料につき、全体の10%までの複写、または、資料の状態によっては、1回5枚までの写真撮影しか認められていなかった。そのため、調査の範囲は限られていたが、幾つかの著作の分析と版の比較を行った。

ここではまず *Traité* の初版と思われる版を閲覧したが、これは第2版と同一であった。

『対位法とフーガ論 *Traité du contrepoint et de la fugue*』（s.d.）の表紙には、「音楽は、心がそれと知らずに計算している、無意識の隠れた算術的営みである」という Leibniz, Gottfried Wilhelm (1646-1716) の言が引用されていた。これは、後に *Esquisse* においても触れられることになる事柄である。この著作は、1824年9月4日土曜日の会議を記述したものであった。この会議と著作の内容に対する賛同者の中には Catel, Charles-Simon (1773-1830)、Cherubini, Luigi (1760-1842) などの当時の理論家の名が含まれている。彼らは、Fux, Johann Joseph (1660-1741) や Albrechtsberger, Johann Georg (1736-1809) の対位法を「古い調性」に基づいて確立された理論であると問題視しており、この会議と著作は、現代（1824年当時）の音楽のシステムにおける対位法とフーガの規則・理論の確立のためのものであったようである。この著作については、前述のコピー範囲の規制と、時間の関係で内容を精査するには至らなかったが、調査の結果、1972年に、1825年のシュレジンガー版の再版がなされているということが分かった。再版のものであれば、1800年代の著作よりも入手が容易いことが想像できるため、今後国内での入手を検討するのに有用な情報を得ることができたと考える。

ベルギー王立図書館で閲覧した資料のうち、もっとも閲覧の時間を割いたのは、Beethoven, Ludwig van (1770-1827) の、和声と対位法についての理論書を Fétis がフランス語に翻訳したものである。Fétis は翻訳のみにとどまらず、内容に細かな批判を加えた注をつけている。この著作のイタリア語翻訳版は、国内に所蔵されているが、フランス語の原著は所蔵がない。注において、Fétis は、和音への数字の付け方、連続音程、不協和の解決の仕方、四度が協和であるか不協和であるか、不協和音への予備の有無、先取

(anticipation) と遅れ (retard) の違いについてなど理論に関する事柄や、記述の重複の指摘に至るまで、細かい批判を繰り返している。これらの批判からは、Fétisの他の和声理論書での主張、つまり、連続音程の使用への批判、音程の分類への批判、自然和音と人工的な和音の区別等<sup>3</sup>を読み取ることができ、やはりその主張が一貫していることを物語っている。この資料に関する詳細も、博士論文において明らかにしたい。

### 3. 今後の展望

今回の海外調査においての成果をまとめると、次のようになるだろう。まず、Fétisの和声理論に関する著作、特に1800年代にのみ出版・重版され、先行研究で触れられていない著作の内容を確認し、調性 (tonalité) やリズムをはじめとするFétisの和声に対する考え方を読み取ることができたということである。もう1つは、同じ著作の異なる版を参照できたことである。フランス国立図書館、ベルギー王立図書館という2館を調査機関としたために、調査する版の範囲を広げることができたということは、いうまでもない。最後に、*La Revue musicale*の記事の閲覧・収集により、今まで全貌は明らかにされていなかった1832年の講義の内容や、当時の理論家とFétisの和声（音楽）理論をめぐる議論などを伺い知ることができたということだ。

以上の資料の閲覧・収集の結果、報告者が推測していたように、Fétisの和声理論は、彼自身が、和声理論についての最初の著作を完成させたと述べている1816年頃から、基本的には変化していないように思える。しかし、1831年頃出版された理論書には、4つの調性のシステムに類似する言及はあるものの、名称等のより詳しい記述が見当たらないこと等から、1831年より後に、その後の和声理論がはっきりと決定づけられたということも推測できるだろう。

調査において収集したものは、準備している博士論文に示すことになるFétisの和声理論についてを補

完する貴重な資料になると考える。近々、平成20年10月25日に行った日本音楽学会での口頭発表「Fétis, François-Joseph [1784–1871] の和声理論における二面性について」を学術雑誌『音楽学』に投稿するための一次資料としてまずは活用したい。

本報告で挙げた事例は、成果の一部である。全収集資料の精査・検討をすすめることにより、Fétisの和声理論をより詳細に解明することができるだろう。

今日、日本国内においては、和声の実践書は多く存在し、西洋音楽導入とともに、和声やその理論に対して多大な関心が寄せられてきた。しかし、和声理論に関する研究は、諸外国から見ると、立ち遅れているというのが現状である。この海外調査をもとに、19世紀の和声理論についてを解明することで、日本の音楽文化研究にも大きく寄与することができるとともに、研究成果を世界に発信し、還元するための一助となると考える。

### 註

1. 第4版の序文は、「第3版序文」というタイトルになっている。調査した限りにおいて、この「第3版序文」が、第3版から、最後の版である第21版までに付与されたと推測される。
2. この著作は、国内の所蔵があるが、国立音楽大学附属図書館所蔵のものはおそらく初版ではなく、版と出版年の記載がないエリザベト音楽大学附属図書館所蔵のものは、セクション5が欠如している。
3. 第59回日本音楽学会全国大会口頭発表「Fétis, François-Joseph [1784-1871] の和声理論における二面性について」レジュメを参照のこと。

### 引用文献

- FÉTIS, François-Joseph 1844 *Traité complet de la théorie et de la pratique de l'harmonie* (2<sup>e</sup> éd.), Paris: M. Schlesinger.  
s.d. *Traité du contrepoint et de la fugue*, Paris: Ozi et C<sup>ie</sup>.

おおさこ ちかこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

### 【指導教員のコメント】

フェティスは、19世紀のフランスとベルギーで極めて大きな影響力を揮った音楽理論家である。しかし、彼の音楽理論についての研究は、海外でも未だ非常に少ない（日本国内では、ほぼ皆無と言ってよい）。これまで、19世紀音楽の研究は、作曲家、楽曲、音楽様式等については盛んに行なわれてきたものの、音楽理論に関しては、ようやく近年になって関心が払われ始めたところである。そして、フェティスに関しても、ごく近年、彼の主著の内の2冊の英訳が出版され、国際的に、研究環境が徐々に整いつつあるという状況である。当然のことながら、

現状では、日本国内の図書館で閲覧できるフェティスについて資料は極度に限定されており、専門的な研究を行なうためには、フランスやベルギーの図書館、資料館に所蔵されている一次資料に当たることが不可欠である。大迫が、今回の海外調査研究で多くの貴重な一次資料(これまで日本ではその存在が知られていなかった資料も含めて)を閲覧することができたことは、彼女の研究にとって量り知れないほどの重要性をもっており、これによって、彼女の学位論文執筆に向けての具体的な道筋が明らかになったと言える。

日本の明治以来の洋楽受容において、その受容対象となったのは、主として18世紀後期から19世紀のドイツ、フランスの音楽であった。日本の西洋音楽受容における音楽理論受容史の研究は、未だほとんど手付かずの状態だが、将来のそうした研究の基礎として、先ず、受容の対象となったと思われる19世紀当時のヨーロッパの音楽理論自体の研究が為されねばならない。その意味で、この大迫のフェティス研究は、日本における音楽理論受容史研究に向けての基礎研究としても位置づけられるだろう。

(お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 近藤 譲)